



TITLE:

<研究発表>和歌山県白浜町に所在
する京都大学瀬戸臨海実験所に漂
着する生物たち

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. <研究発表>和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所に漂着する生物たち. 漂着物学会会報「どんぶらこ」 2016, 55: 4-5

ISSUE DATE:

2016-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217908>

RIGHT:

許諾条件により、墨消しを施している部分があります。

た。最後に植物。ゲンバイヒルガオはわずか2度漂着後発芽したが、どちらも結局は枯死した。テリハボクが2008, 2014, 2016年に漂着した。

II. 「和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所に漂着する生物たち」

久保田 信（和歌山県）

瀬戸臨海実験所は京都大学フィールド科学教育研究センターの附属機関で、90年以上の歴史を有する。同実験所に23年勤務する者として、田辺湾白浜においてほぼ毎日漂着物調査を続けている。（クラゲが専門なので）まず、クラゲについて。大型クラゲの漂着には季節性があり、夏は帆



走性のカツオノエボシなど、冬は内湾性のものなどが多い。繁殖時期による季節性があるが、風との対応が明瞭というわけでもない。次に貝類。これまで少なくとも524種の漂着を確認しており、北限記録のホシダカラガイ成貝の漂着もあった。そのほか、甲殻類としてツノメガニ（冬季凍死）、棘皮動物のコブヒトデモドキ、オニヒトデも漂着する。魚類はオナガウツボはじめ、クマドリやクロハコフグ（成熟できない熱帯魚）など。2011年冬、魚の大量凍死がみられ、3週間で871個体（84種）に上った。2011年の冬の水温は例年より低かったことは確かである。しかし、同じくらいの水温の2014, 15年には大量凍死は起こらなかった。脊椎動物としては、季節的に漂着するハシボソミズナギドリ、偶発性のマッコウクジラなどの迷入などがみられ